

樂邦文類と宗詩紀事

春日 禮 智

樂邦文類五卷は、南宋寧宗の慶元六年(1206AD)四明石芝の沙門宗曉(1151—1214)の編纂せるものである。本書はその後二十四年を経て、後堀河天皇の元仁元年(1218)當時常陸の片田舎に於いて撰せられた親鸞聖人の立教開宗の御本典である教行信證中に六回に互つて引用せられてゐる。教行信證がもと顯淨土眞實教行證文類と呼ばれるべきことはその序題に依つて明かである。この文類の語は、樂邦文類の編者宗曉も斷つてゐるやうに、唐の柳宗直の西漢文類に依つたことは明かである。元來文類の形式は既に六朝時代に於いて梁の昭明太子の有名な文選があり、宋以前に於いても必ずしもその例乏しといふわけにはいかない。併しそれが流行となつたのは矢張り宋代で、宋初には既に冊府元龜とか太平御覽、太平廣記等

の何れも一千卷に及ぶ老大な叢書となつて現れてゐるのである。併し文類の語は殆んど使用されなかつたと見え、さてはかく宗曉が特に斷つてゐるのである。樂邦文類は編纂されると間もなく我が國に傳はり、淨土教遺文集として重寶がられ愛讀せられたもので、長西錄にもその名が載せられてゐる。親鸞聖人は非常にこの名を好まれ、之を教行信證の内題とせられたが、教行信證は教行信證文類、教行證文類、淨土文類と言はれるばかりでなく、其は淨土文類聚鈔を略文類と稱するに對し、廣文類とも呼ばれてゐる。文類聚鈔の中に文類正信偈のあることは周知の事實である。此の外親鸞聖人には往還廻向文類と三經往生文類等があつて、何れも文類の語が使用せられてゐる。此に依つて親鸞聖人が如何に文類の語を愛用せられたかを理解できると思ふ。そしてそれは實に樂

邦文類からの影響と思はれる。樂邦文類は聖人が愛用せられた宋朝淨土教典籍中の隨一であつて、原始眞宗教學に影響する所最も大なるものがある。

二

然るにその樂邦文類は、今日支那には残つてゐないで、獨りわが國にのみ完全に傳へられてゐる。此は極めて興味ある問題で、日本は單に樂邦文類の如き淨土教の典籍ばかりでなく、あらゆる方面の文獻資料で、今日東洋の原産地ともいふべき印度西域南海支那等に残つてゐない色々な東洋の文化や資源を皆この小さな島の中に取入れて包含してゐるのである。其故日本は東洋の博物館とも呼ばれるのである。樂邦文類もその一であつて、或は今後支那で此が発見されることがあるかも知れないが、少くとも完本として今迄知られてゐるものは日本に傳つてきた以外にはないらしい。然るに此に就いて大正新修大藏經には、明正天皇の寛永庚午七年(1630)梓行の樂邦文類を底本とし、之に配するに宗教大學所藏本と稱する一本を甲本と名づけて参照してゐる。大日本續藏經も、淨土宗全書も寛永本を利用したものである。然るに此の和

刻本である寛永本は、此を甲本と比較して見ると非常に誤りが多く、且つ不要の文字を加へ、つまらぬ誤謬を犯してゐるために意味の通ぜない所が少くないのである。

此に依つて吾人は、大正藏經の參考とした甲本なるものが、實はその底本として使用した寛永本よりも遙かに樂邦文類のできた當時の原形に近いものであり、權威あるものであることを知ることができる。この甲本は私はまだ見てゐない。併し大正藏經や續藏經に依れば、此には明の賜進士出身吏部尙書武英殿大學士海虞の嚴訥の撰した樂邦文類序が附されてゐる。明史卷一百九十三に依れば、嚴訥は明の世宗の嘉靖四十四年(1556)に武英殿大學士となり、その年十一月には疾を以て歸らんことを乞うてゐるから、此の序は嘉靖四十四年にもせられたことは明かである。此に依つて我々は、樂邦文類が明末まで支那に傳へられ、而して嘉靖四十四年に至つて鹿亭上人が之を印行し、その本が我が國に傳つて大正藏經の甲本となつたことを知ることができる。

然るに茲に甲本が寛永本よりすぐれてゐることは前述したばかりであるが、此はどうしてあるかと言へば、和

刻本の方は嚴訥の序がなく、たゞ樂邦文類の編纂せられた慶元庚申六年の敷文閣學士宣奉大夫致仕汪大猷の序のみが附されてゐる所を見れば、此の方が甲本よりも渡來が早く、遅くもそれは嘉靖四十四年以前の傳來本であり、之に反し甲本は嘉靖四十四年以後の傳來であつて、此に依つて寛永本に日本人らしい誤りが多く加へられたのも尤ものことと思はれる。實際寛永本は讀むに堪えない程誤りが多いのである。しかも其の多くは大正藏經の甲本に依る脚註を参照すれば易々として通解せられるのである。大正藏經が何故に甲本を底本にしなかつたかを怪まざるを得ないと共に、續藏經、淨土宗全書迄がこの不完全のテキストに従つてゐるといふことは返すがへす残念である。惟ふに之は寛永本には寛永七年の刊行の紀年が明了に記されてゐるために、刊行年月不明の甲本を斥けて、之を底本としたものであらう。しかし底本は飽く迄善本に依らねばならぬとすれば、もつと精密な調査を遂げた上で、テキストの決定を規定すべきであつたと信ずるものである。

三

然るに茲に更に注意すべきは清の高宗の乾隆十一年(一七四六)に、麴鄂の編した宋詩紀事一百卷があり、その中に樂邦文類が三文引用せられてゐる。そて第一文は宋詩紀事卷九十二に掲載せらるゝ祖可の「廬山十八賢」の詩で、此は樂邦文類卷五には東溪釋祖可の詩として同題で收められてゐる。第二文は同じく卷九十二に記載せらるゝ懷悟の「廬山白蓮社」の詩で、此も樂邦文類卷五に禦溪沙門懷悟の同題の詩として載せられてゐる。以上の二文は樂邦文類も宋詩紀事も全同である。ところが第三文になると、寛永本の樂邦文類と宋詩紀事本では大分字句の異同がある。又甲本の樂邦文類と宋詩紀事は、大正藏經の不完全なる脚註だけで見ても、甲本の方が餘程宋詩紀事本に近いことが知られるのである。此に依つて我々は、大正藏經の使用した二種のテキストの中、寧ろ大正藏經の校訂者が底本としなかつた甲本の方がより正確であり、より支那傳來の樂邦文類の原形を止めてゐることを知ることが出来る。即ちその第三文とは宋詩紀事卷九十三に記載する蹄顔の「憶佛軒并序」であつて、此を寛永本では雪溪首座希顔の「憶佛軒詩并序」となつてゐる。今その内

容を宋詩紀事本と寛永本とに依つて比較すれば次の如くである。

自古有言。人生百歲、七十者稀。予年十六、祝髮叨預僧列。今幸七十。處世非久。朝夕人耳。平居非不誦經稱佛、恨未精專。遂取首楞嚴勢至章、若人憶佛念佛、見前當來、必定見佛之語、命小軒曰憶佛。庶幾以爲臨終見佛先容耳。且作偈以繫于左。

三緣老屋許安貧。住處無如憶佛眞。萬事了知猶墮甌。百年唯此可書紳。巖間靜寄蒲團夜。松下聊供茗盃春。閉戶不忘常憶佛。願常終似影隨身。

自古有言。人生百歲、七十者稀。予十六、祝髮叨預僧列。今幸七十。處世非久。朝夕人耳。平居非不誦經稱佛、猶恨未爲專注。遂取首楞嚴勢至章、若人憶佛念佛、見前當來、必定見佛之語、命小軒曰憶佛。庶幾以爲臨終見佛光容耳。且作山偈、以繫于右。

三緣老去許安貧。佳處無如憶佛眞。萬事了知猶墮甌。百年唯此可書紳。巖間靜寄蒲團夜。松下聊供茗盃春。閉戶不忘常憶佛。願常似影隨身。

平日叢林見祖師。還如憶佛在今時。但安谷底三椽地。不掛胸中一縷絲。幽徑落落浮澗水。小窗斜日下松枝。寂然眞境知誰見。唯有金容入夢思。

平日叢林見祖師。還如憶佛在今時。但安谷底三椽時。不掛窗中一縷絲。幽徑落落浮澗水。小窗斜日下松枝。寂然眞境知誰見。唯佛常多人夢思。

右の文中、宋詩紀事の文字の多いのは、序文中の「予年十六」の年の字だけであつて、他は皆少ない。此は宋詩紀事が諸方から引文を集めて、自分の勝手に編纂したものであるだけに、寧ろ省略して少い方が當然である。又寛永本の文字の多い點を舉ぐれば、序文中に「猶恨未爲專注」の猶及び爲、「且作山偈」の山、合計三字多く、差引寛永本が宋詩紀事本より二字多くなつてゐる。次に書體から言へば、宋詩紀事本の「茗怨」の怨が、寛永本では盃となり、「不掛胸中」の掛胸が掛膏となり、「幽徑落花」の花が華となり、「小窗斜日」の窓が窗となつてゐる。併し之は餘り重要ではない。最も重要なのは字句の異同である。序文中宋詩紀事本で「恨未精專」の精專が寛永本では專注となり、「佛先容」の先が光となり、「以繫于

「左」の左が右に誤り、又詩中の「老屋」の老は去に誤り、「唯有金容」の有金容を佛常多に誤つてゐる。以上の中、大正藏經の脚註に依れば、寛永本の光は先であり、右は左で、二字だけ宋詩紀事本に近いことになる。此に依つて、樂邦文類には宋詩紀事所用本と寛永本と甲本との三本のあつたことが知られる。そして寛永本は和刻本であつて最も誤り多く、宋詩紀事所用本は支那本であり、宗教大學所藏の甲本なるものは日本所傳ではあるが、可成り支那本に近いものであり、(或は全然支那本であつて、宋詩紀事本と同じものかも知れないが、今の所未だそこまでははつきりしてゐない)最も誤りの少ないものであると思はれるのである。そして宋詩紀事所引の樂邦文類の引文は、かゝる推定を確めうる最も有力な證左であるといふことができるのである。

四

以上宋詩紀事を有力な傍證として、樂邦文類のテキスト批判を試み、樂邦文類を研究し、利用せんとするものは是非宗教大學所藏の甲本に依るべきところを明らかにしたのである。我々はその甲本の再刊を望むや切なるもの

がある。

宋詩紀事は唐詩紀事、遼詩紀事、金詩紀事、元詩紀事、金唐文紀事等と共に漢籍中、詩文の紀事類の一として知られてゐる。此等の紀事類中より、佛教資料を採訪して之を支那佛教研究に資するといふことも我々に課せられた今後の大切な仕事の一であると思ふ。就中唐・宋・元詩紀事は、その本文全般に互つて佛教的記載が豊富であるばかりでなく、その中には特に釋教作家の作品の部をも設けて此を紹介してゐるのであつて、我々は此に依つて佛教方面では忘れられて顧られなかつた幾多の名僧を東洋文化史上に發見し得るのみならず、假令佛教方面に於いて知られた高僧であつても、全くその僧侶の違つた方面の活躍の部面をも發見することができるのである。即ち此を唐詩紀事に就いて述べれば、本書八十一卷は宋の計有功の名著で、その中には唐代の文集雜說傳記遺史碑誌石刻等に收められてゐる逸詩中より採訪した一千百五十餘家の詩を悉く集録してゐるが、今釋家の部はその中卷七十二―七十七に至る六卷に收められ、五十八人を載せてゐる。その名は法宣、中瘡、子蘭、靈澈、靈一、

清江、廣宣(以上七人卷七十二)法振、常雅、隱丘、法照、冷然、金地藏、皎然、護國、含曦(以上九人卷七十三)文秀、尙能、棲白、無可、神穎、懷濟、應物、可朋、雲表(以上九人卷七十四)虛中、貫休、齊己、殷七七、許碯、許宣中、裴修然(以上七人卷七十五)太易、惟審、滄浩、良入、志定、栖蟾、曇翼、清塞、無悶、文益、修睦、景雲(以上十二人卷七十六)栖一、可止、卿雲、處默、澹交、若虛、僧辯、曇域、懷楚、懷浦、慕幽、尙顏、善生(以上十三人卷七十七)であり、又卷七十九には尼海印一人が附載せられてゐる。此等の中高僧傳に傳の見える者は殆んど十分の一に近い數しかない。宋詩紀事一百卷は乾隆十一年、清の厲鄂の撰したもので、此には清の歸安陸心源伯剛父の補遺が加へられ、宋詩紀事補遺一百卷小傳補正四卷が現存してゐる。本書は厲鄂が二十年の歳月を費して蒐めた三千八百十二人の詩を載せ、その中佛教に關する記事は卷九十一—九十四に至る四卷である。此等の中に記載せらるゝ著名な僧侶は、宋朝の高僧を殆んど網羅してゐるばかりでなく、元來宋朝の高僧として今日傳へられる多くの人々は主として浙江

省江蘇省の出身の人であるが、本書に記載せらるゝ僧侶の名は廣く支那全國に互つてゐる所にその特徴がある。先づ卷九十一には乾康、延壽、永牙、正緣、仲休、贊寧、福全、法常、定諸、布書、保暹、文兆、行肇、簡長、惟鳳、惠崇、宇昭、懷古、清齡、守端、遇賢、德聽、智圓、遵式、用晦、悟清、印粲、文喜、守恭、智仁、晦幾、鑒微、休復、尙能、遇臻、子熙、用文、居昱、昭寂、士可、法泉、文瑩、秀登、祕演、重顯、允堪、契高、曇穎、惠璉、惟晤、有需、誓元、法輝、懷璉、揮璘、無夢、善暹、寶鑾、惟政、則之、繼儒、思雅、惠渙、靈澄、顯忠、清晦、祖心、元淨、文惑、惠隆、宗美、維琳、省回、重喜、曇秀、靚禪師、日益、可遵、道潛、仲殊、愼長老、清順、守詮、先覺、思聰、南越、楚蠻、懶雲、道英、文政、用孫、雲知の九十二人、卷九十二には景淳、元照、克文、僧孚、惟一、了元、奉忠、清外、繼興、遇昌、法平、慶老、淨端、有朋、善權、祖可、如璧、如琳、惠嚴、法具、曇瑩、希雅、士珪、蘊常、德葵、善勤、惠日、懷志、智孜、法秀、普首座、懷清、圓禪師、正勤、靈源、懷悟、昭符、義了、正宗、泉

禪師、信禪師、知和、顯萬、圓璣、惠洪、惠津、梵崇、
 冲邈、文坦、文興、如禪師、宗振、克勤、顯彬、僧印、
 如菴主、小南禪師、思淨、懷深、慧梵、天目僧、村寺
 僧、朱池寺僧、蜀僧、湘僧の六十五人、卷九十三は宗
 杲、曉瑩、有規、僧空、守璋、天石、道全、道舉、普
 聞、紹隆、德止、若芬、淳藏主、惟嶽、仲皎、晞顏、眩
 禪師、志南、古觀、志芝、北野、志文、本正、寶印、惟
 茂、彥強、義傳、刹書記、惟謹、道謙、善建、惠明、永
 蹟、道濟、無木、惠嵩、蓬萊圓禪師、正覺、覺先、石
 採、寶曇、及甫、元昉、善珍、僧儀、道諫、紹嵩、居
 簡、淨照、道冲、元肇、僧輝、僧賢、法照、斯植、可
 齋、道璨、僧愚、法成、僧理、止翁、雲峰德師、祖欽、
 必萬、文物、自彰、淨珪、昭緝、宗瑩、清壹、瑩徹、本
 粹、自南、德豐、希坦、炳同、子溫、了慧、僧朋、吳
 僧、薦福寺僧、福州僧、蜀僧の八十四人、卷九十四は無
 著正覺の二人である。以上合計百四十一人。此の外卷九
 十に葛道人、裴道人、無名道人三人の名が見えてゐる。
 此等は不備なる宋代佛教資料を補ふ重要資料であり、且
 又この時代の淨土教研究資料としても注目すべきもので

ある。

尚ほ宋詩紀事補遺卷九十六、九十七にも澤山の釋家の
 名が連ねてある。即ち卷九十六には、勾令元、保暹、舜
 禪師、紹崇、惟清、佛眼、演和尚、知和尚、了思、子
 千、子明、淨如、希賜、僧震、婁和尚、曇華、了樸、文
 珣、文禮、道璨、僧淵、僧皓、祖智、長考、行元、若
 愚、仲淵、道樞、善勤、無本、仲殊、蘊常、法平、谷
 泉、佛慧、大椿、僧大、眞淨、道川、如洪、咸潤、紹
 瑤、圓悟、師範、法周、需禪師、海禪師の四十七人、卷
 九十七には懷敏、道璫、紹曇、大觀、普度、普濟、妙
 弘、惟俊、智愚、道東、慧開、了惠、行鞏、心月、智
 朋、和菴主、守端、長吉、宗覺、慧明、修信、從坦、衍
 禪師、僧儀、辯山阡禪師、空室道人、晦巖、了元、德
 最、延吉、義光、自閑、道光、德惠、巖隱、怡庵、義
 鈺、僧慈、懶漁、異中、洪海、德清、龍石、惟晦、修
 睦、慈永、景雲、子蘭、尙顏、虛中、清尙、興尙、興
 肇、善月、道章、惠嚴、晦山、圓照禪師本公、谷泉、寶
 玄、藏叟、釋名闕の五十五人の名が見えてゐる。
 元詩紀事二十四卷は民國になつて陳衍の撰したもの

で、此には民國二十三年の燕京大學圖書館引得編纂處編に係る元詩紀事著者引得もある。一體元代の佛教を研究するには明高僧傳の記事は餘り善くできてゐないことは定評がある。此の點本書は可成り之を補ひ、且參考に資する所が多い。その中卷第十五は釋子の部を載せ、子溫、有規、德豐、淨權、存誠、了慧、有在、溥光、明本、行端、圓至、善住、本誠、梵琦、祖柏、若舟、宗衍、文信、普惠、椿、良震、照、自悅、如阜、福報、寧天如、明、清濬、越僧、禪僧、遊僧、無名僧五等の三十七人の名が列ねられてゐる。

以上に依つても解るやうに、唐・宋・元詩紀事の持つ佛教資料としての價値は極めて重要な意義を持つものであつて、我々は此に依つて支那佛教研究上、より廣い視野を開いてかゝらねばならぬことを痛感せしめられるのである。そしてこのことは前述の樂邦文類の引文の性質に依つても理解せられることであるが、更に此等の引文中、その詩の作者に關する厲鄂の解説も亦頗る參考とするに足るものがあるのである。

支那に於ける釋家の傳を記載した權威ある高僧傳は

梁・唐・宋の三傳で終つてゐるから、宋以後の釋家の傳記を調べんとする者は、頗るその資料の探索と選擇に困難を來すばかりでなく、多くの場合は、その搜し求める人を搜し得ないで、折角の努力も徒勞に歸する場合も少くないのである。これは樂邦文類中に登場する人物を解説する場合、我々か幾度となく當惑せしめられることに依つて屢々經驗するところである。前記の三文中の詩の作者である祖可、懷悟、晞顔の如きも、佛教方面の資料では何とも搜して見やうのない人々である。併し宋詩紀事中に、特に樂邦文類の數ある佛教詩人の中からこの三人の詩を選び出してゐる所から見ても、此等の三僧は詩人としても立派な人であつたに相違ないのである。併し彼等は從來全く佛教方面では俗僧として忘れられてきた人々である。從來我々は佛教史を研究する場合に於いて、教學に寄與した人々のみを重要視して、此等佛教の外廓によつて佛教に貢獻した人々の功績を餘りに輕視し、見逃しはしなかつたであらうか。併し其は餘りに偏つた見方であつて、從來佛教史の研究が文化史の水準まで上ることのできなかつた理由の最大原因の一がこゝに

起因してゐるといふことに氣が着いたならば、我々はそのつとこの外廓運動に貢獻した文化人としての佛教家の功績を顯彰しなければならぬ。この點詩文の紀事類の如きはその最も重要な資料となりうるものである。

五

祖可は宋詩紀事に依るに字を正平といひ。丹陽蘇伯固の子である、彼は廬山に住み、悪疾に罹つて癩可と稱せられた人である。宋史卷二〇八藝文志七には釋祖可詩十三卷のあつたことが記されてゐる。宋詩紀事の傳は主として清の張泰來の江西詩社宗派圖録に依つたものらしく、祖可には東溪集、瀑泉集等のよつたことが傳へられてゐる。宋の蔡條紀の西清詩話に、その佳句として「清霜羣木落、盡見西山秋」、「谷口未斜日、數峰生夕陰」等が喧傳され、雄爽の氣風あることを以てその特徴とせられてゐる。又江西通志卷一八〇には次の詩を載せてゐる。

懷人更作夢千里 歸思欲迷雲一灘

窗間一榻茶煙碧 門外四山秋葉紅

祖可の詩は清新にして江西派の一角麟と稱せられてゐる。

る。

懷悟については字瑞竹、禦溪崔氏の子とあるも、其上の手がかりは今の所見出すことはできない。

晞顔は字聖徒、雪溪と號し、奉化の僧である。寛永本樂邦文類には希顔とあるも、江西通志卷一〇七・藝文略傳にも、季幾復撰の晞顔文集の名が見えてゐるから、晞顔の方が正しい。彼の詩は文藻高妙を以て知られてゐる。曾て彼は菜畦に於いて昆蟲の歛鋤に殺生せらるゝを見て憐愍の情に堪えず、遂に菜食を廢して海苔三百六十斤を買求め、日に一斤を採つて粥となして食べたといふことは有名である。晩年桃源の厲氏菴に住し、専ら念佛を修して終つてゐる。

以上の三僧は、何れも佛教方面の資料では殆んどその手がかりさへない人々のみである。然るに我々は宋詩紀事の解説に暗示を得て稍々その人と爲りを知ることができるといふのである。我々は宋詩紀事の如き有益なる藏外佛教資料の援助に依り、益々樂邦文類等の佛教方面の資料だけでは知り得られない釋家の傳とその功績の顯彰に努力したいと思つてゐる次第である。